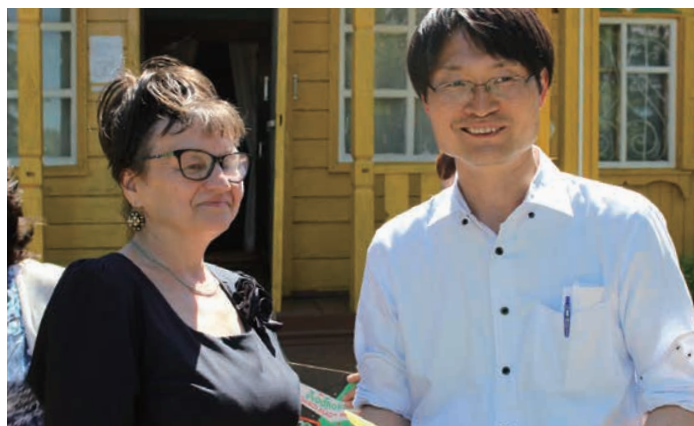




ロシア帝国のイスラーム教徒の歴史から 展望する世界



第8回・2019年度受賞 人文科学部門

長縄宣博

Naganawa Norihiro

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 教授

《受賞研究》

イスラームのロシア：帝国・宗教・公共圏
1905-1917

改めて、ロシアのイスラームを研究する醍醐味はどこにありますか。

ヴォルガ川流域、ウラル山脈、西シベリアに広がる小さなムスリム社会は、帝国の構造、多宗教・多民族の共存、イスラーム世界の多様性などの問題を考える際に、典型的なパターンと同時に地域に特殊な展開を見せてくれます。それは、歴史学上の大きな議論に貢献するだけでなく、大きな一般化の枠組み自体を揺さぶる可能性を持つことを意味します。また、この地域のムスリムはロシア帝国各地、さらにはその外まで移動することがありましたので、地域と地域、国と国を結ぶような視座を研究者に常に要求します。つまり、学界の常識に挑む事例に事欠かないところに私は強い魅力を感じます。

次作の構想を教えてください。

カリム・ハキーモフ (1890-1938) というタタール人革命家・ソ連外交官の伝記を書きたいと思っています (写真の左側の女性はハキーモフの親族)。この人物は、南ウラルと中央アジアでロシア革命・内戦を闘った後、イラン北部とアラビア半島西部で外交官を務めます。1926年にサウジアラビアの基となる政体を最初に承認したのは実はソ連でして、その最前線にいたのがハキーモフです。ハキーモフが躍動した広大な時空間を可能な限り復元すべく、モスクワとロンドンで史料調査をしました。タシュケントにも行かなければならないと思っています。この作品を通じて、帝国の崩壊と再生という激動を個人がどのように生きたのか、そしてこの個人の眼に国際秩序の地殻変動がどのように映っていたのかを描きたいと考えています。

ウクライナ戦争で研究環境は大きく変わりましたか。

2017年に出した単著の「あとがき」で私は、現代世界

の危機は「帝国末期症候群」とも言うべき様相を呈し、末期症状の持続が今後何をもたらすのか予断を許さないと書きました。2022年2月のロシアによるウクライナ侵攻でそれは確信に変わりました。折しも、岩波書店の『思想』の2024年4月号でこの間の考えをまとめる機会を得まして、「長い20世紀の終焉」という論考を書きましたので、ご笑覧いただけましたら幸いです。

コロナが明けてようやく現地調査に戻れるという矢先に戦争が勃発しましたので、多くのロシア帝国/ソ連史研究者が調査地の変更を余儀なくされています。例えば、旧ソ連を構成した国々、フィンランド、中東欧、トルコなどに拠点を移しています。また同時に、これまでのスラブ・ユーラシア研究が陰に陽に前提としてきたロシア中心の見方への反省が広がっています。

2月に私もバクーに行ってきました。そこでは、帝政期のヴォルガ・カスピ水系の港町で万華鏡のように繰り広げられた多民族・多宗教の接触を物語る史料を得ることができました。例えば、写真にある肖像画のナリマン・ナリマノフは、ソヴィエト・アゼルバイジャンの建国者の一人に数えられますが、革命前はアストラハンに流刑されており、現地のシーア派コミュニティと親交を結んだことが知られています (右から二番目の女性はナリマノフの親族)。ロシア帝国/ソ連史研究の地平を拡大するには、ロシア中心の見方を反省しながら既存の史料を読み直すことはもちろんのこと、従来周縁とみなされてきた土地の史料を掘り起こし続けなければなりません。これは、ロシア・イスラーム研究がこれまでもやってきたことですので、今後ますますその役割は大きくなるでしょう。

